

キウイフルーツかいよう病とは

細菌が、枝、新梢、葉、花蕾に感染して発生するキウイフルーツの病気。
学名は「*Pseudomonas syringae* pv. *actinidiae*」。

【発生地域、寄主植物】

- 1 本病原菌は、病原性の異なる4系統が発生。Psa3系統の病原性が強い。
 - ① Psa1系統 日本、イタリア
 - ② Psa2系統 韓国
 - ③ Psa3系統 日本、中国、韓国、イタリア、フランス、スペイン、ポルトガル、ニュージーランド、チリ、スイス、スロベニア、ギリシャ
 - ④ Psa4系統 オーストラリア、ニュージーランド、フランス
- 2 寄主植物は、キウイフルーツなどマタタビ属（マタタビ科）。

【発生生態及び被害】

- 1 本病原菌の発生は、雨や作業器具、接ぎ木で伝染し、生育に好適な温度は10～20度であり、32度以上の高温で死滅する。
- 2 病原性が強い系統は、緑色果実品種より、黄色果実品種に被害が大きいと報告されている。
- 3 被害は、枝や新梢では、2月頃から症状が見られ、傷口等から白色で粘質の細菌液が浸出し乾いて褐変する（写真1）。その後、褐変部より上部が萎凋、枯死する。葉では、4月頃に褐色斑点で黄色いかさ（ハロー）を伴った病斑を形成し、病徴が著しい場合は落葉する（写真2）。
病原性が強い系統では、適切な防除を実施しない場合には廃園の事例も報告されている。

【防除方法】

- 1 感染した枝や葉は本病の伝染源となるため除去し、埋没又は焼却により適切に処分する。また、病徴が著しい感染樹は伐採する。
- 2 傷口から感染するため、防風垣や防風ネットによる風対策を行い、剪定後は必ず傷口に癒合促進剤を塗布する。
- 3 薬剤防除は、細菌性病害に効果の高い銅水和剤や抗生物質（カスガマイシン、ストレプトマイシン等）を使用する。



写真1 枝幹部の病徴
（褐変した細菌液）



写真2 葉の病徴（Psa1系統）
（褐色斑点と黄色ハロー）



写真3 葉の病徴（Psa3系統）
（明瞭なハロー生じない）
（写真：愛媛県提供）